

最近、巨乳のアイドルがやたら目につくが、こういつた傾向は実は今にはじまったことではない。皆さんは知らないかもしれないが、戦後まもない頃にも巨乳ギャルのブームがあったのだ。その立て役者ともいえる財が、ブギウギの女王と呼ばれた笠置シズ子である。彼女は豊かな胸を武器に、若い男性のあいだで絶大な人気を誇った。その最大のヒットが、「豊胸ブギウギ」である。……となごやかな雰囲気のまま進行していきたいのはやまやまだが、まず最初に謝っておかねばならないことがある。前回と前々回と前々々回お約束した月亭八天インタビューの後半は、次回にもちこすことになった。ひとえに私の責任である。その理由はいろいろあって、一言でいうのはたいへん困難だが、そこをむりに一言で要約すると、「めんどくさい」ということになる。なにしろ、いつもはこの雑文を書くのに、だいたい半日から一日ぐらいしか費やしていないのに、前々々回のインタビューは、八天さんに添削してもらい、改稿し……という作業も含めて、十日ぐらいかかった。いろいろ忙しくて、十日と半日を天秤に掛け、今回は（も？）後者を選択したという次第である。

さて、先日、ミステリ作家の竹本健治さんの仕事場にお邪魔して、竹本さんが我孫子武丸さんや新井素子さんと暮を打っているのを晩の八時ぐらいから、翌朝の四時まで、横でぼーっと拝見する……という機会があった。私は暮は全然まる

つきりさっぱりわからない。暮をはじめたいとは思っていないのだが、少しは理解したいと思いい、三日で覚えられることのための囲碁入門みたいな本（暮石をもった宇宙刑事ギヤバン風のヒーローが表紙）を買って、熟読してみた。この本は、小学校三年生の孫のところに、おじいちゃんが訪ねてくる。誰もが、この少年がおじいちゃんに、「近頃、友だちのあいだで暮がはやってるんだ。ぼくも覚えたいからおじいちゃん、教えてよ」とかいつて、暮を教わるのだな、という展開を予想するだろうが、そうではない。おじいちゃんが「わしの友だちはみんな暮を知って、わしだけ仲間はずれなんじゃ。天体望遠鏡を買ってやるから、わしに暮を教えしてくれ。たのむ」と言いだすのである。孫は、天体望遠鏡につられて、おじいちゃんに三日間で囲碁を教える約束をする。しかし、このおじいちゃんが、信じられないぐらい理解が早く、数ページ読んでいくうちに、みるみる暮の原則をマスターして行くのである。私は、途中からついていけなくなり、俺はこのおじいちゃん以下なのか……と情けない思いをした。えーと……何の話だったかな。そうそう、竹本さんのところで、何時間も囲碁を観戦していたのだった。そのあいだ、めちゃめちゃ暇だったので、浅暮三文さんという作家（この人も暮を知らない）とやらだらしゃべっていた。浅暮さんは、某誌に海外での釣り体験のエッセイを連載しているぐらいの釣り好きで、いろいろと話をうかがっているうちに、私のなかにもむらむらと「釣りをしたいっ」という衝動が芽生えてきた。こうみえても、私も昔、釣りをしたことはある。今を去ること三十年ほどまえ。小学校三、四年生の頃、五、六回、防波堤で海釣りをした。だが、あるとき、海に転落して、溺れたので、それ以来、足を洗った。あのまま、やめずに精進していたら、今頃は釣りキチ三平だ。そうそう、私は釣り

キチ三平を全巻持っていたぐらいのファンだったので、  
 (全部、人にあげてしまったが)。この二点をもっしてても、  
 十分、人に釣りのことを語る資格はあると思う。それだけで  
 はない。開高健に「オーバ!」という、海外での釣り体験を  
 つづつたエッセイというかノンフィクションのシリーズがあ  
 るが、あれも好きだった。誰かが、「オーバ!」の本を貸し  
 てくれと言ってきてても、頑として拒み、絶対に貸さなかつた  
 ほどの馬鹿もんであった。私馬鹿よね、「オーバ!」貸さん  
 よね……。

落語に出てくる「釣り」というと、まず「骨(こつ)釣り」  
 (東京でいう「野ざらし」)がある。たいこもちが旦那のおと  
 もで小さな船に乗るが、その日の趣向は、芸子・舞妓に釣り  
 をさせて楽しむというものだった。最初は嫌がっていたたい  
 こもちだが、釣った魚の寸法に応じて賞金が出ると聞いて、  
 がぜんやる気を出す。彼が釣りあげたものは骸骨だった。  
 旦那に言われて、その骸骨を、知りあいの寺に持っていき、  
 ねんごろに供養してもらったたいこもちが、夜、寝酒を飲ん  
 で寝ていると、その骸骨の主が幽霊となって訪ねてくる。

それは、若くて別嬪な女性だった。翌日、となりに住む男が  
 「夕べ来た別嬪は何もんや」とたいこもちを問いつめ、川で  
 釣りあげた骸骨だということ聞きだす。男は、さっそく釣  
 り船を仕立てるが、釣れるのは魚ばかりで、骸骨はまるで針  
 にかからない。中州で小便をしているときに、葦のあいだに  
 骸骨を見つけ、喜んで持ち帰り、たいこもち同様に供養して  
 もらって、酒肴をそろえ、ふともも敷いて、準備万端待ち受  
 けていた男のところに来てきたのは……という噺。最後に  
 やってくるのが、東京落語の「野ざらし」では野幫間(のだ  
 いこ)と呼ばれるたいこもちなのだが、上方落語の「骨釣り」  
 では、な、な、なんと……あの人物である、という点がすご

いすな。聞いたことがない人は、ぜひ「骨釣り」を聴いて、最後にやってくる人物に驚いてもらいたいと思う。

続いて、「鯉船」。旦那のおともで網をうつ船に乗った磯七という髪結い床の男が、鯉を捕まえる。磯七は、船のなかでその鯉を料理しようとするが、鯉ははねて、川のなかにドボン。残念がる磯七のまえに、なぜかふたたび鯉が顔出して……という噺。

「唾の釣り」という噺もある。殺生禁断の池に釣りに行く。役人に見つかったとき、唾のふりをしてごまかせと教えられていた喜六は……という、今ではちよつとやりにくい内容だが、やってる人はやってるようだ。

もう一つぐらい思いつかないかな。何しろ、このエッセイは、資料なしに思いつくままに書いているので、そのときに頭のなかにないことは書きようがないのである。えーと……えーと……えーと……そうそう、「親子茶屋」に「狐釣り」というのが出てくるな。「釣ろーよ、釣ろーよ、信田の森の、狐どんを釣ろーよ。やつつく、やつつく、やつつく……」という、お茶屋でやる鬼ごっこみたいな遊びである。「梨」は「もぎ」で、「栗」は「拾い」で、「松茸」は「刈り」で、「よもぎ」は「摘み」だが、「狐」が「釣り」だとはなかなかわからないだろうな。

では最後に小咄をひとつ。

「クリスティーヌ！ クリスティーヌ！」

「なあに、パパ？」

「釣りにいってくる。じゃあな」

「ちよ、ちよつと、今日はあたしを遊園地に連れていってくれる約束じゃない」

「そうだったかな。ごめん。この次の休みにしてくれ」

「いやよ。パパはいつも、この次、この次って……。今日は

絶対にパパと遊ぶんだから」

「そう言われても、友だちと約束しちゃったんだよ」

「私との約束のほうが先でしょ」

「わがまま言うんじゃない」

「わがままじゃないわ。先生も言ってたもん。約束は守りなさいって。釣りを来週に延ばせばいいじゃない」

「ああ、うるさい。今、いい鰯（ブリ）があがってるんだ」

「鰯？ 鰯って何？」

「おいしいお魚だぞ。寒鰯といってな、こつこつ寒い時期に  
おいしくなるんだ」

「どつちやって食べるの？」

「刺身もいいし、鰯大根といって大根とっしょに煮てもう  
まいし、照り焼きにしてもいいが、やっぱり塩焼きかな。」

「この寒鰯の塩焼きは、すごく昔からあった食べかたなんだよ」  
「どれくらいまえから？」

「五億九千万年くらいまえかな。寒鰯焼きっていうだろ」

「何言ってるのか、クリス、わかんなーい」

「鰯は、釣るのがとてもむずかしい魚なんだよ。サザンオー  
ルスターズも歌ってるだろう。『釣れないぞ鰯、でも……』  
って」

「何言ってるのか、クリス、わかんなーい」

「とにかく今日は釣りにいくな。おとなしく留守番してい  
なさい」

「えー、そんな。じゃあ、あたしも釣りにいくわ」

「何を釣るんだい」

「あたしは、川釣りにするわ。鱒釣りに挑戦よ。クリス鱒釣  
り……って言うでしょ」

「何言ってるのか、パパ、わかんなーい。じゃ、行ってくる  
からな。ばいばい」

「あっ、待ってよ。待ってよ、パパ!」

こうして家庭を省みない父親は、子供をほったらかしにして、毎週、釣りに行っていたが、ある日、とうとう岩場で足を滑らせて転落し、死亡した。それを聞いたクリスティー又は、ぼそつとつぶやいた。

「釣り馬鹿に死……」

次回は、月亭八天インタビューの後半を(なるべく)おおくりしたいと思っておりますので、乞うご期待。

(了)